高知県
地域学校協働活動事例集

高知県地域学校協働活動推進委員会
高知県教育委員会

はじめに

令和3年1月の中央教育審議会答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現』では、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められています。

また、子どもたちの教育については、学校・家庭・地域がそれぞれの役割と責任を果たすとともに、相互に連携・協働してこそ効果が上がるものであり、地域全体で子どもたちの成長を支えていく環境を整えていくことが必要であるとされています。

令和2年度からスタートした本県の第2期教育等の振興に関する施策の大綱及び第3期高知県教育振興基本計画においては、6つの基本方針のひとつに「地域との連携・協働」を掲げ、学校・家庭・地域が一体となって地域ぐるみで子どもを育てる仕組みである地域学校協働本部の設置促進や活動の充実を通じて、学校と地域との連携・協働体制の構築を進めています。

また、学校や子どもたちの課題の解決に向けて、保護者や地域住民等が一定の権限と責任を持つ当事者として学校運営に参画する学校運営協議会（コミュニティ・スクール）と、社会教育活動である地域学校協働活動が密接につながることで、学校や子どもを取り巻く様々な課題に効果的な対応が可能となるため、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一体的に推進することが重要となります。

令和4年度現在、県内の9割以上の小・中・義務教育学校と、県立学校9校に地域学校協働本部が設置され、地域の多様な関係者の参画による地域の特色を生かした様々な活動が行われています。

本事例集は、特色ある仕組みや工夫した取組を行う県内の地域学校協働本部について、活動内容を教育支援活動などの4項目に分類し、その目的やプロセスに加えて、活動を進めていく上での苦労や失敗談も掲載しました。

持続可能で円滑な学校と地域との連携・協働の推進に向けて、本事例集を有効活用していただければ幸いです。

令和５年３月　高知県教育委員会事務局生涯学習課

目　次

学校と地域との連携・協働

地域学校協働本部について ・・ 1

地域学校協働本部の取組により期待される効果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

地域学校協働活動事例 （本部名 ： 活動名）

1 教育支援活動

甲浦地域学校協働本部（桜津っ子を育てる会） ： 甲浦運動会準備 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

伊野南応援団 ： 子どもたちの？はてな？に寄り添う放課後学習教室「はぴもく」 ・・・・・・・・ 5

黒潮町地域学校協働本部 ： まちが学び舎 ～人・もの・こと～ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

山奈小学校地域学校協働本部 ： 山奈小防災フェスティバル ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

2 図書・読書活動

チーム春野東 ： 読み聞かせ活動 ・・ 11

3 地域貢献活動

北川村地域学校協働本部 ： 北川学への地域人材・企業の参画による地域活性化活動 ・・ 13

北陵中学校地域学校協働本部 ： レッツ・リサイクル ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

三原村地域学校協働本部 ： 地域課題解決学習 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

潮江南小学校地域学校協働本部 ： 潮江南夏祭り（地域行事） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

土佐山地域学校協働本部 ： 地域貢献プロジェクト「土佐山フェスティBAL」 ・・・・・・ 21

4 その他活動

葉山中学校区地域学校協働本部 ： クラブ活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

学校と地域との連携・協働

地域学校協働本部について

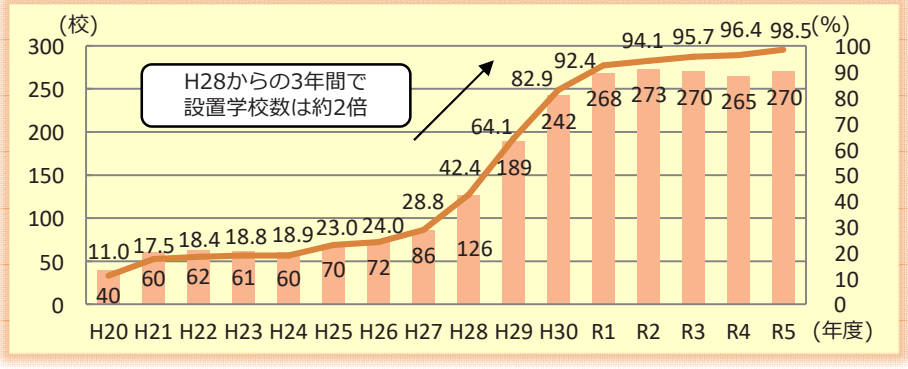
地域学校協働本部の取組経緯

幅広い地域住民等の参画により、地域全体で未来を担う子どもたちの成長を支え、育む体制づくりを目指して、本県では平成20年度から「学校支援地域本部」の取組を開始しました。

平成27年の中教審答申を踏まえ、令和元年度からは、学校と地域との連携・協働の更なる推進を掲げて、「地域学校協働本部」の設置促進及び活動内容の充実に取り組んでいます。

令和４年度末現在、地域学校協働本部は、県内34市町村208本部286校（うち小中学校・義務教育学校は265校）96.4%の設置率となっており、今年度も引き続き設置率100%となるよう取組を進め、学校と地域との連携・協働をさらに推進します。

小・中学校における地域学校協働本部設置学校数・設置率の推移



地域学校協働活動（例）

- ■学習支援
  （放課後学習支援含む）
- ■部活動指導
- ■学びによるまちづくり
- ■地域課題解決型学習
- ■学校周辺環境整備
- ■その他
  （学校行事支援、
  登下校安全指導等）

※アンダーラインはH29より推奨

事業実施により得られる効果【目指すべき姿】

1 学校教育の充実

○地域の様々な大人が学校の活動に関わる

○多くの大人が子どもたちを見守る

○地域住民の協力を得る

子ども
- 子どもたちに**多様な体験・経験の機会**が増える
- **規範意識や自尊感情、コミュニケーション力の向上**につながる

学校
- 子どもたちの**学力や生活面での問題の背景**を把握し、**一人ひとりの状況に応じたよりきめ細かな教育**ができる
- **教員が、教育活動により一層力を注ぐ**ことができる

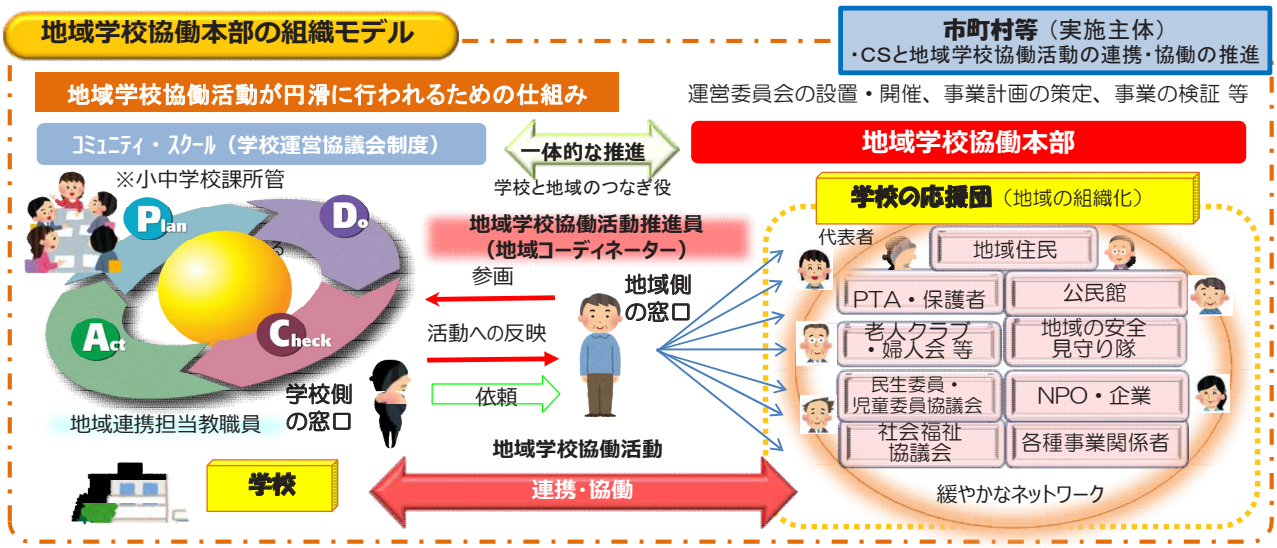
2 地域の教育力の向上

○地域住民が、自らの経験や知識を子どもたちの教育に生かす

○地域住民が学校の教育活動に関わることで、地域の絆が強まる

地域
- **生涯学習の成果を生かす場が広がる**とともに、**地域住民の自己実現や生きがいづくり**にもつながる
- **地域の活性化**や、**学校を核とした地域づくり**にもつながる

地域学校協働本部の組織モデル



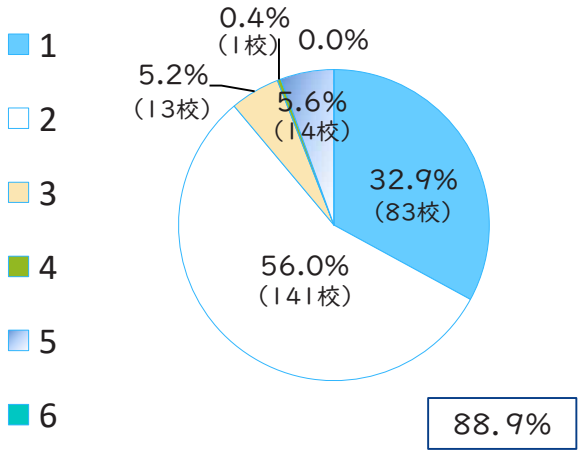
地域学校協働本部の取組により期待される効果

「令和4年度地域学校協働本部事業に関する取組状況調査」より
※事業実施市町村、小学校、中学校、義務教育学校、地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）を対象に実施

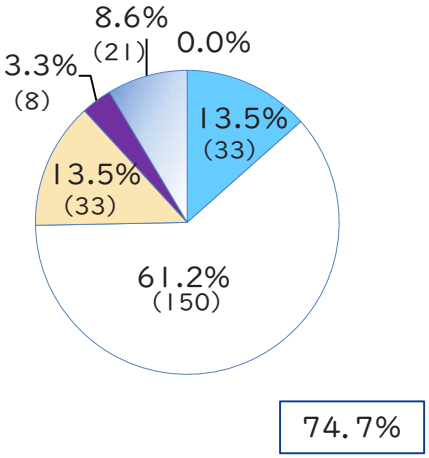
1 本部事業を実施してみて、どの程度効果があったと感じていますか。 ※ ▭ は1．2の合計

選択肢
1 効果が得られた　2 ある程度効果が得られた　3 あまり効果が得られなかった
4 効果が得られなかった　5 分からない　6 無回答

(1) 地域住民が学校を支援することにより、教員が授業や生徒指導などにより力を注ぐことができた
（学校取組状況調査より）

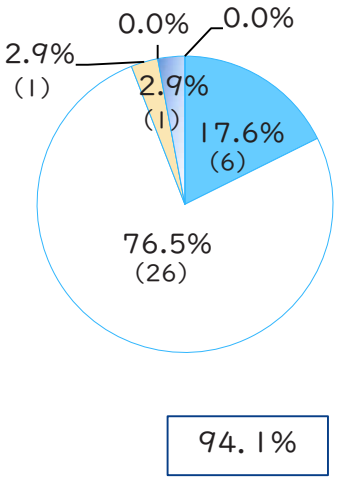


(2) 学校外で、子どもたちと地域住民が交流する機会が増えた
（コーディネーター取組状況調査より）

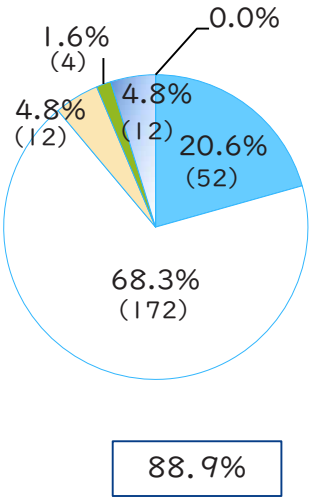


(3) 地域住民が学校を支援することにより、地域の教育力が向上し、地域の活性化につながった

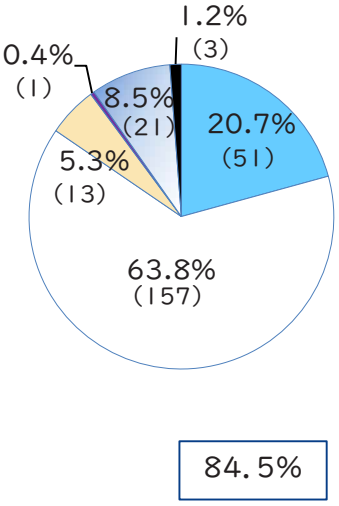
<市町村等>



<学 校>



<コーディネーター>



地域学校協働活動事例

1　教育支援活動

市町村名	東洋町	学校名 本部名	東洋町立甲浦中学校 甲浦地域学校協働本部（桜津っ子を育てる会）
項目 1 教育支援活動		活動 （タイトル）	甲浦運動会準備 （地域参加によるテント設営や環境整備）
		教科との 関連	保健体育
		取組学年	全校

学校の特徴	令和5年度以降の入学予定者数は5名以下が続き、規模縮小が予想されている。 生徒数は少ないが、生徒たちは明るく元気で学業や部活動に熱心に取り組んでいる。 令和4年度生徒数：24名
地域の特徴	東洋町は、高知県の東端に位置し、大半を山林が占めている。産業は水産業のほか、果樹栽培が盛んな町である。人口は、2,000 人ほどで少子高齢化が進み、人口に占める65歳以上の高齢化率も50%を超えている地域である。

概要

1. 始めたきっかけ（活動の目的・必要性）

新型コロナウイルス感染症の広がりにより、運動会の準備の際にもコロナ対策等に配慮し、運動会開催時に必要なテント（来場者用も含む）を学校が全て準備・設営していたが、生徒や教職員にとっては大きな負担となっていた。

そこで、甲浦保育園、甲浦小学校、甲浦中学校からなる「甲浦地域学校協働本部」（桜津っ子（さくらづっこ）を育てる会）の地域への周知と、学校運営への協力体制の構築を目的に、令和3年度より取組を開始した。

2. 活動に至るまでのプロセス

（1）令和3年4月　第1回甲浦地域学校協働本部総会開催

甲浦地域学校協働本部委員・地域学校協働活動推進員・保育園長・小・中学校管理職と各校の地域連携推進担当教員・東洋町教育委員会が参加した総会を開催し、保育園・小学校・中学校から協力してもらいたいことを具体的に提示する。

その後、 甲浦地域学校協働本部全体（保育園、小学校、中学校）として初めて取り組む内容を運動会準備（テント設営や環境整備）とすることを確認する。

（2）4月初旬　ボランティア募集案内郵送（登録ボランティアに東洋町教育委員会が発送）

（3）4月中旬　学校便り等により保護者・地域へ周知する。

（4）当日　朝と正午に町内放送で参加呼びかけを周知する。

3. 活動の様子

【テント設営作業風景】

【テント設営作業後の集合写真】

<table>
<tr><td rowspan="6"></td><td colspan="2">活動に関わっている人・団体</td></tr>
<tr><td colspan="2">地域ボランティア（地域住民、保護者）、地域学校協働活動推進員　　（約90名）</td></tr>
<tr><td colspan="2">コーディネートのポイント</td></tr>
<tr><td colspan="2">〇この取組のポイントは、少子化の影響もあり、保育園・小学校・中学校だけでの運動会開催が将来的に困難になっていくことから、「地域参加型の運動会」（最終ゴールは地区民運動会形式）への転換をめざしていることを、地域と共有することである。
〇令和２年度よりコロナの影響で中断している「300人のフォークダンス」を皮切りに、目に見える地域参加型運動会への転換や、甲浦地区学校運営協議会及び甲浦地域学校協働本部で、運動会の競技の内容や運営方法などの方向性を確認してきたことが、取組を継続できている要因と考えられる。</td></tr>
<tr><td colspan="2">取組の中での苦労や失敗　等</td></tr>
<tr><td colspan="2">〇令和3年度に初めて行った「運動会準備（テント設営や環境整備）」後に開催された甲浦地区学校運営協議会での振り返りでは、生徒や保護者の参加を求める声が上がった。
〇令和3年度の運動会準備当日は、部活動の大会日と重なったため、生徒の半数近くが参加できず、また引率に関わる保護者の参加も少なかった。
〇令和4年度は、部活動の大会日を避け、保護者が集まりやすい参観日の午後に「運動会準備（テント設営や環境整備）」を組み入れたことで、地域・保護者・生徒・教職員が協力して、総勢約90名で取り組むことができた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">活動後の変容</td><td>成果</td><td>〇令和4年度で2回目となったこの取組には、当初から甲浦地区学校運営協議会委員の方々も参加している。そのため、後日行われた同運営協議会の中で議題として取り上げ、評価・改善していくPDCAサイクルを回すことができている。このサイクルを回すことにより、活動のモットーとも言える地域の皆さんが参加しやすい「できる人が　できるときに　できることを」が実践できているように思う。
〇「ゆるやかなネットワーク」で結ばれた地域の皆さんが、地域と地域の子どもたちのために活動できる場を拡げていくきっかけともなっている。</td></tr>
<tr><td>課題</td><td>〇未だ収束の兆しを見せない新型コロナウイルス感染症は、甲浦地域学校協働本部の活動にも影響を与えている。
〇地域ボランティアには高齢者も多く、学校としても積極的な交流は難しい状況と考えている。このような状況下で、「子どもたちのために」、「地域のために」という志や熱い思いを持っていただいているボランティアの皆さんの思いをどう活かしていくのかが課題である。
〇そのためにも、直接、または地域学校協働活動推進員を介した対話を充実していかなければならないと考えている。</td></tr>
</table>

市町村名	いの町	学校名 本部名	いの町立伊野南小学校 伊野南応援団
項 目 1 教育支援活動		活動 （タイトル）	子どもたちの？はてな？に寄り添う放課後学習教室 『HAPPY もくようび』通称「はぴもく」
		教科との関連	算数 国語
		取組学年	全学年

学校の特徴	校区に鉢巻山や奥田川があり、自然に囲まれた郊外の学校。 すべての学年が単式で、特別支援学級が 4 クラスある。 令和 4 年度児童数：164名
地域の特徴	昔からある八田地区、池ノ内地区と、約 30 年前に開発された団地がある天王地区から構成される地域である。地域住民の学校への思いは熱く、子どもがいなくなることが廃校につながり、結果、地域が衰退していくという強い危機感を持っている方も多く、そうならないよう学校に対し、多くの支援をくださっている。しかし、主力となる方々が高齢化し、うまく次の世代にバトンが渡されていない状況でもある。

概要

1. 始めたきっかけ（活動の目的・必要性）

宿題や授業での課題を自分一人では済ませることのできない児童が各学級で数人おり、学級担任が放課後に教えていたが、一人の担任では一度に対応できる児童数に限りがあり、学力保証が十分なされているとは言えなかった。

そこで、学習ボランティア長※に相談し、「学習」ボランティアやその他のボランティア登録をしてくださっている全ての地域ボランティアの方々及び高知大学に、週に一度個別で学習支援をしてもらえないか呼びかけ、令和元年より学習支援が必要な児童を対象とした放課後学習教室「HAPPY もくようび（通称「はぴもく」）」の活動が始まった。

※本校の伊野南応援団には「学習」「環境」「安全」「図書」の 4 つのボランティア組織があり、各ボランティア組織の代表者（ボランティア長）が活動の柱となっている。また、各ボランティア長は学校運営協議会のメンバーとなっている。

2. 活動に至るまでのプロセス

（1）学級担任が、年度当初に児童の実態を把握した後に、該当の児童及び保護者に「はぴもく」の趣旨を説明し、参加の承諾を得る。

（2）並行してコミュニティ・スクール（CS）担当教員が学習ボランティアに「はぴもく」の趣旨を説明し協力依頼を行う。担当教員は「はぴもく」開催日を選定して学校と地域ボランティアに周知し、参加者を募る。

（3）地域コーディネーター及び教頭が、児童の特性に応じてマッチングを行い、各教室において活動初日を迎える。

3. 活動の様子

【1対1の嬉しい時間】

【今日はどうかな？】

	活動に関わっている人・団体	
	伊野南応援団（地域ボランティア、高知大学の学生と先生）　（延べ 100 名）	
	コーディネートのポイント	
	○地域人材だけでなく、高知大学の教育学部と地域協働学部に協力を依頼し、大学生に学習ボランティアとして「はぴもく」に参加してもらえるようになった。各学級担任は当日参加する学習ボランティアと児童の情報（前回見てもらって以降の児童の学習理解度と、今日指導してほしい内容等）について事前と事後に共有するようにしている。「はぴもく」に参加する学習ボランティアは延べ 100 人ほどになっている。 ○「はぴもく」終了後は、毎回校長室にて校長及び教頭が各学習ボランティアから、児童の学習の理解度や各学級担任との情報共有状況等を確認し、次に生かすようにしている。	
	取組の中での苦労や失敗 等	
	○当日欠席した児童がいたが、学習ボランティアとの情報共有ができておらず、時間を調整して遠方から来ていただいたのに、肝心の教える児童がいないということがあった。 ○学校で担当教員を決め、木曜日の朝には各学級担任に出欠の確認を必ず取るようにし、欠席があった場合は地域コーディネーターと共有し、学習ボランティアに連絡してもらうことで、教える児童が休んでいるということのないようにした。	
活動後の変容	**成果**	○１対１で真摯に対応してくれる学習ボランティアの存在のおかげで、当初は、学習に対し意欲的でなかった児童が「はぴもく」の時間を待ち望むようになり、学習にも意欲的に向かう姿が見られるようになった。
	課題	○地域ボランティアの存在は大きくありがたいが、高齢化は避けられないことから、大学生が恒久的に学習ボランティアとして参加できるシステムを構築していくことが課題である。 ○大学生は、現在無償で学習ボランティアとして「はぴもく」に参加しており、報償費は出せないまでも、交通費の支給や学習ボランティアとして活動してくれた時間を大学の単位として認定できるなど、本校と大学生の双方にとってメリットがある関係を構築していきたい。 ○こうした仕組みが町内、更には県内全域に広まれば、より多くの支援を児童につなげられると考える。児童を支える存在として地域だけでなく、高校生や大学生もその一員として参加できるよう、こうした仕組みを構築できればよいと思う。

<table>
<tr><td>市町村名</td><td>黒潮町</td><td>学校名
本部名</td><td>黒潮町立南郷小学校
黒潮町地域学校協働本部</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">項目
1 教育支援活動</td><td>活動
（タイトル）</td><td>まちが学び舎～人・もの・こと～</td></tr>
<tr><td>教科との関連</td><td>総合的な学習の時間</td></tr>
<tr><td>取組学年</td><td>全学年</td></tr>
<tr><td>学校の特徴</td><td colspan="3">本校は、高知県西南地域の黒潮町に位置し、校舎からは雄大な土佐湾が眺望できる。
児童数は、緩やかではあるが年々増加傾向にある。要因の一つとして、県内外からの移住者の割合が多い事があげられる。（児童数の約3割）黒潮町の温暖な気候や自然環境の豊かさに加え、UI ターンによる地元回帰を促進する黒潮町総合戦略の成果ともいえる。
学級数は8学級（特別支援学級3学級）で編成されている。5・6年生は複式学級だが、令和元年度から教科担任制として組織を整えてきており、主要な教科はほぼ単式化されている。
生活科・総合的な学習の時間を中心に、地域の「人・もの・こと」を理解し、児童自身も地域社会の一員として自覚し、地域に貢献できる人材となるよう、各教科活動と関連させる学習プランを設定し取り組んでいる。特に前年度から1人1台の情報端末が整備され、学習環境が変化する中、情報端末を効果的に活用し、多様な課題に対応し解決する能力を育成するために、地域住民と対話し協働しながら学ぶ教育活動を積極的に推進しているところである。
令和4年度児童数：54 名</td></tr>
<tr><td>地域の特徴</td><td colspan="3">黒潮町では教育振興基本計画の柱を「ふるさと・キャリア教育」とし、「ふるさとを愛し、ふるさとに誇りを持ち、ふるさとの課題を見つけ、提案、解決、人の役にたつ生き方ができ、コミュニティーの一員として自覚を持った児童生徒の育成」を目指し、地域総がかりで教育活動を支援することを目指している。
平成20年度から組織されていた「南郷の子どもを育てる会」を母体に、平成30年度からコミュニティ・スクールとして活動を始めた。これを機に地域住民による児童の登校時の見守り活動が再開され、見守り体制も強化された。また、地域の「人・もの・こと」を教材とした授業には、地域住民がボランティアとして協力してくれる等、学校への地域住民の愛情と期待が感じられる。
なお、地域は南海トラフ地震津波浸水想定区域であり、大雨等による土砂災害の危険性が高い場所も多い。地形的にはリスクも大きいが、だからこそ地域住民で支え合ってきた強いつながりもある。共に命を守り、これからの黒潮町の未来を創る担い手として、地域と協働した防災・安全教育も積極的に取り組みを進めている。</td></tr>
<tr><td>概

要</td><td colspan="3">1 始めたきっかけ（活動の目的・必要性）
上述したように、黒潮町総合戦略の目的は2060年に町人口6，800人を達成することである。黒潮町の学校として、その目的を考慮した教育活動を推進する必要がある。移住してきた方は自らこの地を選択し生活していることから、自然環境への関心が高く、教育観が多様である。学校は、これまで気づかなかった考え方や価値観を受け入れながらも、従来の地域の慣習や風土、普遍的な教育観、倫理観を大切にし、黒潮町だからこそできる教育活動を創意工夫し実行することが、黒潮町総合戦略の目的を達成させる一つの手立てだと考えている。
まずは、児童が地域の「人・もの・こと」を教材に、地域・保護者と協働した体験活動を通して、ふるさと黒潮町の良さや課題を実感する必要がある。地域の良さや課題を自分事として考えることで、地域社会の一員としての行動化につなげていく。
児童にとって、住んでいる地域への愛着は、将来大人になった時の心の糧にもなり、また地域に貢献する態度にもつながる。
また、地域住民と関わり合うことで、温かいまなざしや言葉にふれ、自分がかけがえのない一人であることを実感することができ、児童の自尊感情の高まりも期待できる。</td></tr>
</table>

2 活動に至るまでのプロセス

(1)	2月	今年度の活動の振り返り（課題検証）・次年度の年間活動計画作成
(2)	3月	次年度の年間活動計画の確認
(3)	4～6月	各学年・教科部会において活動内容の確認
(4)	6～7月	各学年の活動内容及び進捗の確認・見直し
(5)	9月	次年度の年間活動計画・予算案の作成・調整・申請
(6)	11月	学校運営協議会・安全教育実践委員会で児童会が活動報告
(7)	12月	各学年の活動内容及び進捗の確認・次年度の年間活動計画作成
(8)	2月	学習発表会（各学年が取り組んできたことの報告会）

黒潮町教育委員会
学校運営協議会
安全教育実践委員会
保護者・地域住民

各学年が学習発表会までに発表朝会で学習経過を報告

児童の学習状況や心情・態度との関連を検証
活動内容を全教員で確認・調整し新たなプランを作成

3 活動の様子 【地域と協働した第5学年学習内容】

地域ボランティア

1学期～2学期

《クジライスプロジェクト》
- ❑黒潮町の農業（1時間）
- ❑田植え（2時間）
- ❑田の管理（害虫・雑草駆除作業）
- ❑稲刈り（2時間）
- ❑精米袋詰め作業（2時間）
- ❑販売準備（2時間）
- ❑販売（2時間）

1学期～2学期

《海の魅力発見》
- ❑環境学習（1時間）
- ❑海の遊びの危険について地元サーファーから学ぶ児童総会（1時間）
- ❑ビーチクリーン活動
- ❑サーフィン教室（3時間）地元サーファーから学ぶ

2学期～3学期

《海の恵み box》
- ❑黒潮町の漁港探検（4時間）
- ❑入野漁港の素潜り漁を調べる（3時間）
- ❑ホエールウォッチング体験（2時間）
- ❑学習発表会に向けて準備
- ❑報告会

「学習テーマ　黒潮町の魅力を発信しよう」

活動に関わっている人・団体

地域ボランティア（地域住民、保護者）、民生委員、黒潮町教育委員会（地域学校協働活動推進員）27人

コーディネートのポイント

○年間活動計画を作成する際に、各学年担当と学習内容やボランティアに協力をお願いしたい活動内容を確認する。：プロセス(1)(2)
○活動に参加して下さるボランティアに失礼のないように礼を尽くし段取る。：プロセス(3)
○年間活動計画に伴って早め（最低1か月前）にボランティアと打ち合わせをし、活動後は児童のお礼の手紙（学習感想）を渡す。：プロセス(4)(6)
○準備物等予算の必要な活動は、前年度の9月までに各学級担任と連絡調整し予算計上する。：プロセス(5)
○活動後は成果や課題を明らかにし、教員間で共有し次年度の年間活動計画に生かす。：プロセス(7)

取組の中での苦労や失敗　等

○校外学習は危険が伴うため、教職員、地域ボランティアだけでなく保護者にも協力を要請した。

活動後の変容

成果

○学校評価アンケート「ふるさと貢献意識項目」肯定的評価は100%となった。
○校区全体の学校安全に関する意識が高まった。
○保護者の学校行事等への参加率が上昇した。（愛校作業等ほぼ100%参加）

課題

○多様な価値観や教育活動への意見を受容しながら、教育効果のある活動を精査し実行する必要がある。検証に基づく年間活動計画の作成と全体共有が大切。
○感染症対策等で予定通り実行できない活動もあったが、可能な範囲で内容を変更し取り組んだ。全て中止ではなく、臨機応変に対応し学習を保障するために組織力とマネジメント力が重要。

<table>
<tr><td>市町村名</td><td>宿毛市</td><td>学校名
本部名</td><td>宿毛市立山奈小学校
山奈小学校地域学校協働本部</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">項目
1 教育支援活動
「防災学習」</td><td>活動
（タイトル）</td><td>山奈小防災フェスティバル</td></tr>
<tr><td>教科との関連</td><td>学校行事</td></tr>
<tr><td>取組学年</td><td>全学年</td></tr>
<tr><td colspan="2">学校の特徴</td><td colspan="2">令和３年度より、開かれた学校づくり推進委員会の組織をもとにコミュニティ・スクールを設置し、地域学校協働本部の活動と連携・協働して、地域・保護者・学校が一体となった取組を進めている。
また、本校は、平成29（2017）年から日本セーフティープロモーションスクールの認定を受け、学校での安全教育に力を注いでいる。 令和４年度児童数：83名</td></tr>
<tr><td colspan="2">地域の特徴</td><td colspan="2">校区全体で学校への協力を惜しまない方々が多く、さまざまな場面で助けていただいている。
年間を通して、地域と共に「山奈見守り隊」の活動を行っているが、コミュニティ・スクールのメンバーも高齢化が進み、世代交代を進めなければならない時期にきている。</td></tr>
<tr><td>概

要</td><td colspan="3">1. 始めたきっかけ（活動の目的・必要性）
・本校は平成29（2017）年度からセーフティープロモーションスクールとしての認定を受け、生活安全・防災・交通安全についての取り組みを進めている。そんな中で、南海トラフ地震や近年増えている洪水、土砂災害についても、防災学習を続けている。
・児童は、1 日の3分の2は家庭や地域で過ごすため、学校での取組を家庭、地域に広げ、地域全体の防災意識を高める取組が必要となってくる。そこで、高知県防災砂防課「子ども防災キャンプ」の指定（令和2年10月）を受け、コミュニティ・スクールを母体に実行委員会を組織し、学校・家庭・地域・関係諸機関が一体となり、1 日かけて地域を挙げての防災学習を実施をすることにした。
2. 活動に至るまでのプロセス
（1）令和２年９月に高知県防災砂防課「こども防災キャンプ」に応募（令和２年10月29日採択）
（2）令和３年５月25日 第１回山奈の子どもを育てる会（学校運営協議会）で今年度の活動の確認
（3） 7月15日 防災参観日「山奈小防災フェスティバル」第1回準備会
（4） 9月 7日 防災参観日「山奈小防災フェスティバル」第2回準備会
（5）10 月 12 日 防災参観日「山奈小防災フェスティバル」第3回準備会（最終）
（6）10 月 23 日 山奈小防災フェスティバル（防災参観日）
フェスティバル参加者数： 地域住民・保護者・児童 約170名 ＋ スタッフ 約 50 名 ＝ 約 220 名
3． 活動の様子
・山奈の子どもを育てる会（学校運営協議会）が主体となり、学校・家庭・地域・消防など、多くの方々に関わっていただき、地域ぐるみで防災意識を高める取組として『家族や地域とともに災害についての知識を学習し、いざという場合の対応方法を体験することで、自分で自分の安全を守る力を身に付ける ～「セーフティープロモーションスクール」としての活動の一環として～』を行った。
・当日は、11 個のブース（ロープワーク・災害パネル展・地震体験・消火訓練・土石流3D シアター・降雨体験・津波模型体験・煙脱出訓練・土砂災害学習・南海トラフ地震学習・津波映像学習）を８班のグループで順次回りながら、1 日かけて学習を深めていった。（班の構成員は、児</td></tr>
</table>

童・教員・保護者・地域で、1グループ 18～19 人）

【降雨体験】

【津波模型体験】

【防災食体験】

活動に関わっている人・団体

山奈の子どもを育てる会（学校運営協議会）、PTA、隣保館、宿毛消防署、山田地区消防団、各地区代表、民生委員、宿毛市教育委員会、高知県防災砂防課（約 220 名）

コーディネートのポイント

○前年度最後の「山奈の子どもを育てる会（学校運営協議会）」において、次年度の取組として「防災ファスティバル」実施の承認を受けることとした。

○地域学校協働本部の地域コーディネーターと協力して、消防署・消防団、各地区区長、民生委員、各地区の自主防災メンバーに参加・協力依頼を事前に行った。

取組の中での苦労や失敗 等

コロナ禍での実施のため

○昼食の防災食は大窯で作って、炊き出し体験としてその場で分けながら食べるようにしたかったが、感染予防の観点から、防災食を 250 人分ほど用意し、班ごとに配り食べることとした。

○ブースの見学、土石流3D シアターでは、密を避けるため人数制限や、中を透明なシートで仕切ったりする必要があり、画面が見えづらくなってしまった。

○降雨体験では、本来なら 10 人分程を用意して順番に使うレインコートを、個別に用意する必要があり、レインコートを広げて乾かす場所が必要となった。

活動後の変容

成果

【児童の感想】

○「降雨体験や3D シアターで大雨や土石流の怖さが分かった。家族で気を付けたい。」

○「いろいろな体験学習を通して、普段から防災に気を付けなければならないと思った。」

【地域の感想】

○「田舎の小さな学校でも、みんなで協力したら、こんな立派な取り組みができるのだと思い感激をした。地域・保護者・児童など校区全体の防災意識の向上にとって意義のある取り組みだった。」

○「子どもたちと一緒の班となり、子どもたちにお世話になりながらブースを回り、改めて子どもたちの力を知れてよかった。」

【教員の感想】

○当日までの準備、当日の参加など、たくさんの方の協力を得ることができ、改めて、地域の力を感じることができた。

○当日の班のお世話を、6 年生が中心となり進めることで、児童が地域の方や保護者に評価される場面をつくることができ、児童の自己有用感の向上にもつなげることができた。

課題

学校・保護者・地域・関係機関で協力した取組を通して、地域の防災意識を高めることができたと思う。この取組をこれからの日々の生活に繋げることが大切である。

2　図書・読書活動

市町村名	高知市	学校名 本部名	高知市立春野東小学校 チーム春野東
項目 2 図書･読書活動		活動 （タイトル）	読み聞かせ活動
		教科との関連	国語
		取組学年	全校

学校の特徴	校区は海や山など豊かな自然に恵まれ、児童の活動としてウミガメの保護活動を行ったり、学校周辺の田を活用して田植えや稲刈りを行ったりしている。 校区には大きな団地があり、そこから通う児童の割合が多いが、団地人口の減少とともに児童数は年々減少傾向にある。 令和4年度児童数：370名
地域の特徴	高知市南部に位置し、土佐湾に面している。近世初期に土佐藩執政の野中兼山が仁淀川八田堰から弘岡水路、新川川へ導水してから平野の開発が進んだ。現在はメロン、ナス、キュウリなどの施設園芸が盛んで、また、山麓斜面ではミカン、新高ナシが栽培されている。 県内最大のスポーツ施設である県立春野総合運動公園があり、多くの人が訪れている。

概要

1. 始めたきっかけ（活動の目的・必要性）

読み聞かせの会「たんぽぽ･ぽ」は平成13（2001）年に発足した。

平成16（2007）年に子どもの入学をきっかけに、学校で既に取り組まれていた読み聞かせに興味を持ち、読み聞かせの会「たんぽぽ･ぽ」の活動に、読み聞かせ保護者サポーターとして参加した。

活動を続けていく中で、児童の卒業とともに保護者サポーターが減り、存続が難しくなったため、児童にも読み聞かせサポーター（児童サポーター）として参加してもらうことで活動を継続している。

児童サポーターは午前８時25分～35分の10分間、割り振られたクラスに入り、おすすめの本や好きな本の読み聞かせを行っている。

2. 活動に至るまでのプロセス

当初、活動の主なメンバーは在校児童の保護者を中心に構成されていた。そのため児童の卒業に伴いボランティアが減少し、存続が難しくなった。そこで、読み聞かせを継続するための対策を考えるにあたり、児童に意見を聞き、4年生以上に読み聞かせサポーター（児童サポーター）として活動への参加を呼びかけることとし、児童が活動に参加することについて学校へ検討を依頼する。

（1）毎年度の初めに4年生以上に読み聞かせ児童サポーター募集のチラシを配付する。
　（平成22（2010）年から児童サポーターの活動開始）

（2）児童サポーターの割り振り、段取りは、保護者サポーターで行う。

（3）読み聞かせがスタートする時に、割り振り結果に基づく児童サポーターあての活動参加依頼書を保護者サポーターが作成する。

（4）読み聞かせ地域サポーター（元保護者、地域の方）にはメールで予定を連絡する。

3. 活動の様子

【読み聞かせ】〈保護者サポーターがそれぞれの学年に適した本を読んでいる様子〉

活動に関わっている人・団体

地域の方、保護者、4年生以上の児童 （ 68 名）

コーディネートのポイント

○「楽しい」活動を基本軸に置いている。活動については無理をしないことを大切に考え、急なキャンセルも受け止めて対応するようにしている。読み聞かせ活動に関するマニュアルの内容について保護者サポーターで話し合い、学校の意見も取り入れて作成・更新するようにしている。

○児童サポーターには、事前にできる限りマニュアルの内容を確認してもらい、休む時や困りごとは保護者サポーターに伝えてもらうようにして、その都度対応している。

取組の中での苦労や失敗 等

○先輩方の立ち上げた活動を継続するため、当初はいろいろと一人で悩むことが多く、ほかの人に仕事をうまくふることができなかった。そんな時に、頼りにしていた活動仲間に言われた「そんなに私は頼りになりませんか。」の言葉に良い意味で自分が開き直ることができて、現在の活動方法が生まれた。

○保護者から「児童サポーターとしての活動への参加についてはしっかりと検討して欲しい」「同学年のクラスでの読み聞かせ活動はトラブルの火種になる可能性もあるので避けてもらいたい」などの率直な意見もいただき、そのおかげで児童サポーターの募集チラシの改善、サポート体制の見直しに生かすことができた。

活動後の変容

成果

○地域の方も児童との協働の活動を楽しんでもらっていると感じる。良い意味で堅苦しさがとれ、穏やかに活動できるようになった。

課題

○今年度で読み聞かせ活動の中心メンバーの児童が卒業を迎えるため、新規の保護者サポーターの確保が必須になっている。この数年コロナ禍で読み聞かせサポーターの募集ができなかったこともあり、引継ぎも含めて今後の運営について模索中である。

3　地域貢献活動

市町村名	北川村	学校名 本部名	北川村立北川小学校・北川村立北川中学校 北川村地域学校協働本部
項目 3 地域貢献活動		活動 （タイトル）	北川学（地域学）への地域人材・企業の参画による地域活性化活動
		教科との関連	生活科・総合的な学習の時間
		取組学年	小学校1年生～中学校3年生
学校の特徴	小中一貫校として、学校教育目標や目指す子ども像を統一し、小中学校のベクトルを合わせながら9年間を見通した児童生徒の育成を図っている。 令和4年度児童数：45名　生徒数：22名		
地域の特徴	人口減少が顕著な典型的な中山間地域であり、村の存続を見据え、特産物であるゆずを中核とする産業の構築や子育て・教育の充実等に取り組んでいる。		

概要

1. 始めたきっかけ（活動の目的・必要性）

令和元年度の学校運営協議会設立準備委員会や保護者懇談会等で、地域住民や保護者の参画のもと、村の子どもの現状について協議した。その中で、少子化や村の人口減少が進む中においても、地域への愛着心やコミュニケーション力、自己肯定感等を育むことの重要性や必要性が議論された。

また、本校では、令和元年度から県指定事業を受け、生活科や総合的な学習の時間において、地域学である「北川学」の研究に取り組んでおり、令和4年度で研究4年目を迎える。活動に際しては、村民や企業など北川村に関連する様々な方の参画を得て、児童生徒の地域への愛着心や貢献心、コミュニケーション力、自己肯定感等を育むことを目的として活動を充実させている。

2. 活動に至るまでのプロセス

（1）地域コーディネーターや地域学校協働活動推進員が、日常的に学校と連絡を取り合い、北川学活動の趣旨や内容、予定等について把握する。

（2）学校から依頼を受けた地域コーディネーターや地域学校協働活動推進員が、参画していただきたい北川学活動の内容について地域ボランティアや企業等に連絡する。

（3）該当学年の学級担任と打ち合わせを行う。（学級担任、地域コーディネーター、地域学校協働活動推進員、地域ボランティア及び企業）

（4）活動後、学校と地域コーディネーターが活動の振り返りを行い、今後のさらなる活動の充実に向けて協議を行う。

3. 活動の様子

○令和2年度：小学5年生「モネの庭の魅力を発信しよう」

村の観光地である「北川村『モネの庭』マルモッタン」の魅力を発信するために、取材を通して動画を作成。動画は映像コンテンツに応募し、総務大臣奨励賞を受賞。

【シェフへのインタビュー】

【庭の整備作業を取材】

【動画の編集作業】

【リモート審査の様子】

○令和4年度：中学3年生「ゆず石けんプロジェクト」

村をPRし地域の活性化につなげたいという生徒たちの思いから、ヘアオイルなどを製造・販売している化粧品会社の参画を得て、令和3年度から本村産のゆずを使用した「ゆず石けん」の商品開発に取り組んでいる。

【村内ゆず工場を取材】 【ゆず農家への聞き取り】【化粧品会社へのプレゼン】【ドラッグストアで広告作成】

活動に関わっている人・団体

地域ボランティア（地域住民、保護者）、ゆず農家、村内外企業、村観光協会、村役場、地域コーディネーター、地域学校協働活動推進員 等 （約110名）

コーディネートのポイント

○地域ボランティアに参画していただく際には、目的、日時、内容を明確に伝え、行き違いのないように心がけている。また、参画していただいた方には、可能な限り公開授業や発表会への案内を行う他、成果物を配布するなど、活動内容の情報発信を行っている。

○村外の企業など、日常的に面会が困難な場合は、必要に応じてリモートによる打ち合わせを実施。これによって、活動の確認作業が一斉かつ詳細にできるようになっている。

○北川学だけではなく、愛校作業など地域に参画をいただきたい活動に係る依頼・報告について役場と連携を図り、全戸配布や広報誌への掲載を行うなど、幅広く周知を図っている。

取組の中での苦労や失敗 等

地域人材の協力を得る際、文書でのみ依頼を行ったことで、活動の趣旨や内容が十分伝わっていないことがあった。それ以降は、必ず電話や直接会って依頼するなど、話し合いを通して本来の趣旨に沿った活動となるように留意している。

活動後の変容

成果

○北川学等の内容を広く周知することにより、地域の活動への参画意識が高まり、ボランティア登録数の増加に結びついている。（R1：25名→R3：85名）

○各種アンケートにより児童生徒の意識の向上が見受けられる。

・「自分にはよいところがある」（道徳意識調査における肯定的評価）

R1小学校当初：92%→R3小学校年度末98%

R1中学校当初：76%→R3中学校年度末：100%

・「話し合いや意見交流により自分の考えを深めたり広げたりすることができた」

（北川学（地域学）アンケートにおける肯定的評価）

R1小中学校当初：80%→R3小中学校年度末95%

・「地域の中で自分たちにできることはないか考えることがある」

（北川学（地域学）アンケートにおける肯定的評価）

R1小中学校当初：84%→R3小中学校年度末95%

課題

○新型コロナウイルス感染症の影響もあり、内容や時期によって、活動を控えなければならない状況にある。活動に応じた感染予防対策を講じることはもちろんのこと、場合によってはリモートで活動を実施するなど、活動が継続・発展できるような手立てを事前に想定しておくことが重要。

○村の「ひと・もの・こと」などの教材研究を深め、北川学を系統的かつ発展的に取り組めるよう活動のさらなる見直しや参画体制の拡充が必要。

<table>
<tr><td>市町村名</td><td>南国市</td><td>学校名
本部名</td><td>南国市立北陵中学校
北陵中学校地域学校協働本部</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="4">項目
3 地域貢献活動
（資源回収）</td><td>活動
（タイトル）</td><td>レッツ・リサイクル</td></tr>
<tr><td>教科との関連</td><td>SDGsの取組み（全教科・領域）</td></tr>
<tr><td>取組学年</td><td>全学年</td></tr>
<tr><td></td><td></td></tr>
<tr><td>学校の特徴</td><td colspan="3">本校は昭和41年10月に4つの中学校の統合により誕生し、昭和42年10月、岡豊町笠ノ川の地に各分室の生徒と教職員が集まり、教育活動が開始された。昭和45年からは国府小学校校区も加わり、令和４年度に創立55周年を迎えた。校区には岡豊・国府・白木谷・久礼田・奈路の5つの小学校がある。
令和４年度生徒数：177 名</td></tr>
<tr><td>地域の特徴</td><td colspan="3">学校と地域との繋がりは強いものがある。地域の方々からは、通学路の見守りや安全整備、学校花壇への花植え等を通して、生徒に温かい声がけをいただきながら、学校を応援していただいている。
令和４年度は地域学校協働本部事業として地域の方々の協力のもと、年間を通して学校敷地内の花を育てている。早朝や放課後には生徒会執行部や部活動の生徒が自主的に水やり等の世話を行っている姿が見られる。
その他にも、生徒会執行部が校区の民生委員・児童委員と連携して、各学期１回、校門付近において朝の挨拶運動を行っている。
また、本校は公立学校としては全国でも稀な、地域の方々による「後援会*」を組織しており、物心両面において学校を支援していただいている。
※北陵中学校の教育振興発展を後援することを目的とし、地域の方々が昭和53年に設立した組織。</td></tr>
<tr><td>概
要</td><td colspan="3">１．始めたきっかけ（活動の目的・必要性）
長年に渡って「レッツ・リサイクル」（地域挙げての資源ゴミの回収）に取り組んでいる。本活動は、全校生徒と教職員、保護者、後援会、地域の方々が共に汗を流す中で、「労をいとわずに熱心に作業できる本校の生徒の良さ」を皆さんに知っていただける絶好の機会にもなっている。
収益金の一部については、東日本大震災において被災した（本市と姉妹都市関係にある）宮城県岩沼市の玉浦中学校との交流にも活用してきた。

２．活動に至るまでのプロセス
（１）活動日程や当日の作業等についての周知
①開催日や当日の作業等については、文書で生徒と保護者に周知してきた。地域への周知に関しては、本活動のために結成された地区別生徒会を定期的に開催し、生徒が地域へのチラシ配布やゴミステーションへのポスター掲示を行ってきた。また、後援会や学校運営協議会、民生委員・児童委員の方々にも協力していただいている。
②後援会では、各地域の理事会や役員会、全体の理事総会において活動を周知し、各理事からは、地域の会合において伝達していただいている。また、学校運営協議会や校区の民生委員・児童委員の方々については、全体会において協議会委員に周知を図り、それぞれから地域の取組等を周知していただいた。さらに、校区のJAの支所や郵便局等にもチラシを置かせていただき、可能な限り地域の方々に周知できるようにしてきた。
（2）当日の運搬車の協力依頼
①当日は、各地区の資源ゴミを学校まで運搬する車（軽トラック等）の確保が必要不可欠となるため、最初に、コミュニティ・スクール・ディレクター※や地域学校協働活動推進員、PTA役員や保護者への依頼を行った。
※学校運営協議会の会議運営や、学校運営協議会委員との連絡・調整、学校種間の連絡等に関わる業務等、学校運営協議会に関わる業務を担う地域人材
②後援会や学校運営協議会へも依頼を行った。その過程において本校の卒業生にも情報が伝わり、「レッツ・リサイクル」当日には全13地区に計30台（事前に学校に連絡をいただいたのは22台であったが、当日参加も含めて、約30台）の協力を得るに至った。</td></tr>
</table>

3. 活動の様子

「レッツ・リサイクル」当日、生徒や地域の方は午前8時30分に各地区の集合場所に集合する。

その後、地域のゴミステーションに置かれた資源（自宅前に置かれている場合もある）を回収し、運搬車に載せる作業を繰り返し行い、各地区における作業終了後に学校に登校している。

登校後は運動場において回収車への詰め込み作業を行っている。

【運動場で回収車へ詰め込み作業中】

【資源を仕分けしている様子】

活動に関わっている人・団体

地域ボランティア（地域住民、保護者）、後援会会員、学校運営協議会委員、地域学校協働活動推進員、PTA 役員 （約120名）

コーディネートのポイント

〇生徒に、地域を巻き込んだ本活動を行い、その収益の一部が生徒総会から要望が出された校舎の設備改善等につながることを意識させることで、より主体的な取組となるように考慮してきた。その他にも、後援会や学校運営協議会、民生委員・児童委員の方々との日頃からの連絡を密に行い、学校行事の際には、協力をしていただける体制づくりを行っている。

取組の中での苦労や失敗 等

〇後援会や学校運営協議会、PTA役員、民生委員・児童委員の方々に協力していただくためには、日頃から連絡を密にしながら、つながっておくことが大切である。

〇7月に日程等の1次案内を地域に配布してきたが、令和4年度の本取組は、地域住民への周知を徹底させるために、早い時期に配布する必要があった。そこで、5月頃から地区の回覧板や放送等も利用しながら、地域住民への周知を行った。

活動後の変容

成果

〇学校運営協議会の設立に向けた取組みを行ってきていたが、新型コロナウイルス感染症拡大により、取組みが遅れ、2年間を要した。主な取組みの一つに後援会の組織の見直しがあった。後援会が設立されてから、44年目を迎え、組織的な弱体化や会員の方々の高齢化もあり、理事の役割について見直す必要があった。そこで、校区内の5地区の理事を新たに選出し、初の試みとして、各地区の理事会を行った。理事会後には、これまでと同様に理事総会を開催し、今後の後援会の活動等について協議するに至った。

〇学校運営協議会設立と地域学校協働本部事業の核となる後援会組織が活性化されたことにより、新たな形で、生徒と教職員、保護者、後援会、地域の方々が連携して、校区全体を巻き込んだ活動「レッツ・リサイクル」が実現できた。

〇本校の生徒の強みである、「労をいとわずに熱心に作業できる本校の生徒のよさ」を活動に関わる地域の皆さんに知っていただける絶好の機会にもなり、収益金の一部については、校舎の設備改善等に活用、主体的な生徒の育成を図ることができた。

課題

〇後援会や学校運営協議会、PTA役員、民生委員・児童委員の方々に協力していただき、地域住民への周知を行ってきたが、本取組の日程等を知らなかった地域住民がいたことから、周知の困難さを実感している。

<table>
<tr><td>市町村名</td><td>三原村</td><td>学校名
本部名</td><td>三原村立三原小学校・三原村立三原中学校
三原村地域学校協働本部</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">項目
3 地域貢献活動</td><td>活動
（タイトル）</td><td>地域課題解決学習</td></tr>
<tr><td>教科との関連</td><td>生活科・総合的な学習の時間、体育</td></tr>
<tr><td>取組学年</td><td>小学1年生～中学3年生</td></tr>
<tr><td>学校の特徴</td><td colspan="3">一村一小学校、中学校。小学校、中学校ともに複式学級が 1 学級ずつある。
村人口が 5 年間で 200 人近く減少し、児童生徒数も激減している。
令和4年度 児童数：47名、生徒数：14名</td></tr>
<tr><td>地域の特徴</td><td colspan="3">高齢化は進んでいるが、「子どもは宝」を合言葉に学校教育全体に非常に協力的である。</td></tr>
<tr><td>概
要</td><td colspan="3">1. 始めたきっかけ（活動の目的・必要性）
「中山間地域における特色ある教育課程推進事業」（県指定H31～R2）を受け、小・中学校で本事業の目標として「ふるさと三原に誇りを持ち、その行く末に主体的に関わりを持つ人を育てる」を設定した。また、取組を進めるにあたって、学校運営協議会にもご協力いただいた。
小・中学校を通じて、ふるさとに誇りを持つ人を育てるために、まず、地域について精通することから始めなければいけないが、学校の事業担当者は異動したばかりで、本事業に生かすことのできる地域の資源を知るために、まずは地域を知ることが必要であった。

2. 活動に至るまでのプロセス
（1）平成30年地域学校協働本部設置
（2）平成31年地域学校協働活動推進員任命、学校運営協議会設置
（3）推進事業の一環として、コミュニティスクール先進地岐阜県白川村立白川郷学園を視察
児童生徒の「15 歳の独り立ち」を促進するため、また地域の担い手を育てるために行われている、「地域学」としての地域協働活動について教員が学んだ。「世界遺産の村」である白川村であっても、「人口減少」という抱える課題は三原村と共通のものである。歴史や文化を守り、地域学の活動をされている方を学校に招聘し語っていただき、その思いを世界中から訪れる観光客に伝える、という活動を中学生も担っていること、また、その活動を通じて中学生の自己有用感も向上していることを学ぶことができた。
（4）「人口減少が急激に進んでいる本村において、移住者や交流人口を増やすにはどうしたらよいか」という課題を解決するために「総合的な学習の時間」を核としてカリキュラム・マネジメントを進めた。具体的には、生徒自らが地域の方々の思いを知り、村の産品や自然、歴史・文化を深く知るための活動や学んだことをもとに地域外に村の魅力を発信するために産品を販売したり、村の良さを発表したりする活動を計画していった。
（5）総合的な学習の時間は、地域の「人・もの・こと」という教育的資源をどう生かすかが重要となる。地域学校協働活動推進員を中心に学校の行いたい活動に最適な講師を紹介いただき、活動を円滑に進めることができた。</td></tr>
</table>

3. 活動の様子

【地域課題解決学習テーマ設定～「三原の未来を考える」】

【地域産品のアピールのための販売に向けて仕入れ】

【地域産品販売（高知市 JA とさのさとにて）】

【小学 5、6 年生 伝統芸能で「三原をプロディース」】

【中学生による太刀踊り伝承】

【三原の語り部になろう 地域講師への発表】

活動に関わっている人・団体

地域学校協働活動推進員、学校運営協議会、村在住者（地区長含む）、村出身者 （延べ62名）

コーディネートのポイント

〇地域学校協働活動推進員に学校の活動の趣旨を伝え、可能な限り地域の方や、三原村にゆかりのある方を講師としてお招きしている。

取組の中での苦労や失敗 等

〇令和元年度は地域学校協働活動に対する教職員の認識が不十分で、「開かれた学校づくり」との活動の違いを認識できていなかったため、研修の機会を持った。また、学校の事業担当者が地域人材や地域の様子を知らなければ活動自体が難しいと感じている。

〇特にコロナ禍で、交流活動が止まる中、当初予定した取り組みの大幅な変更を余儀なくされた。対面での活動をオンラインに変えたり、研修旅行の日程が二転三転したりするなど臨機応変な対応が必要だった。そのような中でも、「学校のすることだから」と地域学校協働活動推進員や地域の方々には、様々なご協力をいただいた。

活動後の変容

成果

〇学校と地域が互いを巻き込みつつ地域の課題を考えていくことで、連携が強化された。

〇生徒の地域や社会への貢献に対する意識の向上が見られた。

「社会人になっても、自分たちの地域や高知県のためになる仕事をしたいと思う」（道徳意識調査 中学生全学年対象）

R2年度末 88.9%→R3年度末 92.3%

課題

〇地域学校協働活動を持続的に行っていくために、村内の壮年層とどうつながっていくか。

〇地域の担い手の世代交代や教員の異動に伴う地域学校協働活動への理解や意識の希薄化にどう対応していくか。

<table>
<tr><td>市町村名</td><td>高知市</td><td>学校名
本部名</td><td>高知市立潮江南小学校
潮江南小学校地域学校協働本部</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">項目
５　地域貢献活動</td><td>活動
（タイトル）</td><td>潮江南夏まつり（地域行事）</td></tr>
<tr><td>教科との関連</td><td></td></tr>
<tr><td>取組学年</td><td>全学年</td></tr>
<tr><td colspan="2">学校の特徴</td><td colspan="2">令和４年度に創立５０周年を迎える学校。数年前まで中国からの帰国子女が在籍していたこともあり、学校行事の中に地域とのつながりが深いもの（中国に由来する獅子舞・中国舞踊、旧正月を祝う餅つき）がある。
令和４年度児童数：２５６名</td></tr>
<tr><td colspan="2">地域の特徴</td><td colspan="2">地域の方々は、学校の教育活動に協力的で、様々な場面で積極的に支援してくださる土壌がある。また、年間を通して地域の諸団体が「子どもたちのために…」という思いのもと、連携・協働して様々な行事を企画・運営している。</td></tr>
<tr><td>概
要</td><td colspan="3">１. 始めたきっかけ（活動の目的・必要性）
潮江南小学校区では、毎年７月の第４日曜日に「地域の子どもたちと大人が一堂に集い、楽しく夏まつりを過ごすことを通じて、地域の人々の交わりを深めるとともに、学校・地域の連携を一層高めるため、地域のすべての団体の協力による事業となること」を目的として「潮江南夏まつり」が開催されている。
この夏まつりに、地域学校協働活動の一環として、児童が積極的に参加することで、地域の大人や園児との交流をもつことができ、また、地域の文化について知り、その文化を継承していくきっかけになると考えている。
併せて、児童が夏まつりに主体的にかかわり、地域の大人や子どもとふれ合うことによって、達成感や自己有用感を得ることができると考える。

２. 活動に至るまでのプロセス
〇学級担任を通じて、児童に「潮江音頭」「スーパーライブ」「エコ隊」「出店手伝い」「宣伝部」「あいさつ係」への参加者及び「絵馬」作成者の募集を行う。
〇地域学校協働活動推進員は、地域の「潮江音頭」伝承者への協力を呼びかけ、伝承者と共に児童や保護者へ踊りを伝授する。
〇潮江音頭
・参加希望の児童は、昼休み（７月）に地域のお年寄りや地域学校協働活動推進員から、潮江音頭を教わる。（４回程度）
・最後の練習は、夜間に行っている大人の練習と一緒に行う。
・３年生児童の中から希望者を募り、１学期末保護者面談日の放課後に、潮江南小学校区の保育所、幼稚園（４園）へ潮江音頭を教えに行く。
〇スーパーライブ（ステージ上でパフォーマンスを行う）
・参加希望の児童は、当日までに各々で披露するパフォーマンスの練習に取り組む。
・進捗状況の確認は、教職員で行っておく。
〇エコ隊
・参加希望の児童は、グループを組み担当時間帯を決めて、祭り当日、ゴミ拾いをしたりゴミ収集場所の案内をしたりする。</td></tr>
</table>

○出店手伝い
・参加希望の児童は、担当時間帯を決めて、祭り当日、PTA 学年部主催の出店の手伝いをする。
○宣伝部
・希望する児童は、祭り当日、町内放送等を活用して、「潮江南夏まつり」の広報活動を行う。
○あいさつ係
・係を希望する児童は、夏まつり開会セレモニーで開会のあいさつを行う。
○絵馬作成
・作成を希望する児童は、和紙に絵を描き、灯篭用の木枠に貼りつける。
・祭り当日、通路等につるす。（大人）

3. 活動の様子

【スーパーライブ】

活動に関わっている人・団体

潮江南夏まつり実行委員会*（実行委員：約８０人）、潮江南地区町内会、潮江南体育会、潮江南小学校区青少年育成会議、潮江南小学校 PTA・PTAOB、潮江南地域連合会
＊実行委員は地域学校協働活動員を兼ねている方が多数

コーディネートのポイント

○PTA 役員を充て職として潮江南夏まつり実行委員会の委員に位置付けることで、地域・保護者・学校（児童、教職員）が一体となって活動できるようにしている。
○地域学校協働活動推進員の１人が放課後等学習支援員を兼ね、週４日学校での勤務があることで、学校の要望に迅速に対応できる地域学校協働活動になっている。

取組の中での苦労や失敗 等

○潮江南夏まつりへの参加はあくまでも自主的なものなので、年によって各活動への参加人数が少なくなることが課題である。今後は、児童の興味・関心を引くような手立てが必要である。

活動後の変容	**成果**	○各活動の中で、地域の大人が児童の頑張りを認め、声をかけてくださったり褒めてくださったりすることで、児童の自信につながり、２学期以降の学習活動への意欲や次年度への意欲にもつながっている。
	課題	○「潮江南夏まつり」自体が、コロナウイルス感染症の影響で令和２（２０２０）年から３年間中止となっている。次回開催まで期間が開くことで、これまでの引継ぎが円滑に行えず、盛大に行えていた地域のお祭りに支障をきたすのではないかと心配している。

<table>
<tr><td>市町村名</td><td>高知市</td><td>学校名
本部名</td><td>義務教育学校土佐山学舎
土佐山地域学校協働本部</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="4">項目
3 地域貢献活動</td><td>活動
（タイトル）</td><td>地域貢献プロジェクト
～土佐山地域に観光客を呼び込もう～
（土佐山フェスティBALの開催）</td></tr>
<tr><td>教科との関連</td><td>総合的な学習の時間・美術・国語</td></tr>
<tr><td>取組学年</td><td>9年生（中学3年生）</td></tr>
<tr><td></td><td></td></tr>
<tr><td>学校の特徴</td><td colspan="3">本校は平成28年度、義務教育学校として開校し、土佐山学を教育課程の中心に据え、地域の人や自然との関わりを通して郷土愛を育み、様々な人・もの・ことに触れる中で資質・能力を磨き、自尊心を高めている。また、土佐山学を通して自分の生き方を考えさせるなど、キャリア教育につなげることを目的として学習を進めている。
令和４年度児童生徒数：138名</td></tr>
<tr><td>地域の特徴</td><td colspan="3">平成23年に、高知市が3つの基幹からなる「土佐山百年構想」を打ち出し、土佐山の強みを生かした持続可能な地域づくりに取り組んでいる。そのプロジェクトの1つとして土佐山学舎が誕生した。
明治の自由民権運動の時代から続く「夜学会」等を通じた地域全体での社会教育が根付いており、社会・学校が一体となって地域の子どもを育てるという風土がある。</td></tr>
<tr><td>概
要</td><td colspan="3">1. 始めたきっかけ（活動の目的・必要性）
総合的な学習の時間（土佐山学）の授業では、地域の良さや課題を追究しながら解決するという探究のプロセスを大切に取り組んでいる。令和3年度に、8年生が「自然豊かで、食材や史跡に恵まれた土佐山が、なぜ知名度が低いのか。」に着眼し、課題解決のために、「土佐山フェスティBAL（祭り）」を地域に呼びかけ、開催することとなった。
祭りでは、土佐山の食材にこだわり、地域の企業にも参画いただき、この祭りでしか味わうことができない土佐山オリジナル商品「土佐山梅まん・梅パイ」を開発、販売した。令和4年度は、前年度の課題をもとに祭りを活性化させるためには、どんな手法が有効か、地域にとって持続可能な祭りにするには、どのような連携が必要かを再追究している。
2. 活動に至るまでのプロセス
【令和3年度】
（1）夏季休業中から土佐山学担当者と学級担任が次年度の土佐山学の年間計画（案）作成、計画（案）をもとに地域コーディネーターや関係者と会議を実施 （7月～12月）
（2）土佐山学の年間計画の作成 （令和4年3月）
【令和4年度】
（1）学校運営協議会：土佐山学の取組概要の説明（5月）、活動の進捗報告と承認（9月）
（2）地域学校協働本部（課題別コミュニティ部会）：土佐山学の取組内容の説明及び協力依頼（6月）、活動の詳細を報告後、具体的な支援内容の依頼（9月）
（3）活動プロジェクトチーム立ち上げ（地域コーディネーター・地域の関係者・教職員・9年生及び保護者で構成） ※活動プロジェクトチーム（第1回：7月、第2回：9 月、第3回10月）：内容の精選と確認、準備と運営の確認
（4）土佐山フェスティBALの実施 （10月30日）
（5）活動プロジェクトチーム：反省会 （11月）
（6）第3回運営協議会：9年生生徒による活動の報告 （12月）
（7）土佐山学参観日で発表会 ※地域・関係者を招待 （令和5年1月）</td></tr>
</table>

3. 活動の様子

【土佐山フェスティBALオープン】

【地域の方と一緒に販売準備】

【令和３年度の振り返りの様子】

活動に関わっている人・団体

生徒・教職員・保護者・学校運営協議会・地域学校協働本部※・地域コーディネーター・地域の企業・地域住民（30名）※（地域連携コミュニティ部会・学びコミュニティ部会・生活安全コミュニティ部会）

コーディネートのポイント

〇見通しをもって取り組むことができるよう、活動開始の半年前から土佐山学担当者・学級担任が計画を立て、地域や関係機関と「誰に、どのような支援をしてもらいたいのか」等、活動の具体的な内容について話し合っている。また、話し合いの際には、本活動を通して児童生徒に身に付けさせたい資質・能力は何かを明確にしておき、地域と共有している。

取組の中での苦労や失敗 等

〇早い段階から年間の計画を立てていくため、学級担任が現在の児童生徒の学びの様子を見取りながら次年度の土佐山学の見通しを立てていくことが難しい。

〇どれくらい資金が必要か、資金をどう集めるかを見据えて予算案をたてておく必要がある。

〇70時間という長い活動内容であるため、追究する価値のある課題となっているか、学習を通してどのような資質・能力を育てていきたいかを明確化しなければ、単なる体験学習となってしまう。

活動後の変容

成果

〇児童生徒の生き方のモデルとなっている身近な地域の方や保護者が活動に関わってくださることで、地域や学校に誇りを持っている児童生徒が多い。

〇土佐山学では常に本物と出会い、体験するため、解決が難しいことにも粘り強く取り組んだり、どうすれば実現可能になるのかを熟考したりすることができるようになっている。

〇様々な「人・もの・こと」と関わりながら学習するため、コミュニケーション力や表現力が磨かれ、地域や社会に貢献しようという意欲が育ってきており、夢や志をもつ児童生徒の育成にもつながっている。

《令和4年度全国・学力学習状況調査　児童生徒質問紙の結果》

・『将来の夢や目標をもっていますか』　中学校全国+22.7ポイント

・『難しいことでも，失敗を恐れないで挑戦していますか』 中学校全国+12.9ポイント

・『総合的な学習の時間では，自分で課題を立てて情報を集め整理して，調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか』　中学校全国+7.9 ポイント

〇学校運営協議会や地域学校協働本部、地域住民の方々に、活動に必要な準備の多くを担っていただき、学校側の準備の時間が大幅に減少している。また、地域と児童生徒・保護者、教職員が三位一体となって取り組んでいるため、学校が地域に根ざしている。

課題

〇地域の人的・物的資源を有効に活用できるようマネジメントしたり、活動の質を高めたりするためには、地域のことを知っている教員が土佐山学を担当していくことが望ましく、人材を育成する必要がある。本校は、土佐山学と各教科をカリキュラム・マネジメントすることで、教員の資質・能力を育んでいるが、着任間もない教員や若年教員に対して、本校の目指す取組について周知する時間が十分確保できていない。

〇地域の高齢化が年々進んでいるため、学校への協力者が限られてきている。また、協力者も働いている方が多く、勤務時間内での話し合いの時間を確保していくことが困難な場合が多い。

4　その他活動

<table>
<tr><td>市町村名</td><td>津野町</td><td>学校名
本部名</td><td>津野町立葉山小学校
葉山中学校区地域学校協働本部</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">項目
4 その他活動</td><td>活動
（タイトル）</td><td>クラブ活動</td></tr>
<tr><td>教科との関連</td><td>体育、家庭科、図画工作</td></tr>
<tr><td>取組学年</td><td>4，5，6年</td></tr>
<tr><td colspan="2">学校の特徴</td><td colspan="2">明治5年学制施行から150年を迎えた学校である。津野町の東部に位置し、ここ20年間、全校児童120名前後で推移してきたが、令和4年度は児童減少期に入っている。 令和4年度児童数：106名</td></tr>
<tr><td colspan="2">地域の特徴</td><td colspan="2">中山間地域ではあるが、学校周辺はスーパーマーケット、コンビニエンスストア、ドラッグストアなどの店が立ち並び、最近では町外からの移住者も増えている。
古くから地域住民は学校を大切にし、教育活動に対して、保護者とともに協力的である。</td></tr>
<tr><td>概
要</td><td colspan="3">

1．始めたきっかけ（活動の目的・必要性）

平成9年から始まった「土佐の教育改革」が推進される中で、地域と学校のつながりが重視され、本校では平成12年度より地域住民（地域ボランティア）をクラブ活動*の講師として招聘し、活動を行ってきた。

※学習指導要領に特別活動として位置づけられた、小学校４年生以上の同好の児童をもって組織する活動。

その後、平成28年度に学校運営協議会を設立し、コミュニティ・スクールとして歩み始めることにより、学校教育活動への地域住民の参画が拡がり、今日まで継続されており、学校の多忙化が叫ばれる中、教員の負担軽減にも大きな役割を果たしている。

2．活動に至るまでのプロセス

（1）令和3年度末にクラブの内容について総括を行い、今の時代（コロナ禍など）にあった内容及び取組方法となるように見直しを行う。

令和4年度の活動においては、マンガ、手芸、料理、囲碁・将棋、バドミントン、グランドゴルフ、卓球の7クラブを開設。

地域の方が講師となり、準備から運営まで行っている。

（例）調理クラブ：材料の買い出し→調理道具の準備→調理指導→片付け

クラブ活動時間内（1 時間）で活動が終了するように計画・実施している。

（2）令和4年度に開設するクラブに対して、児童に希望調査を行う（前期2月、後期11月）。

（3）地域の中で、開設するクラブに対応する特技を持っている方にクラブを担当し、講師として児童への実技指導を行っていただくよう依頼する。（校長・教頭）

（4）クラブ担当教員が当日の運営について事前確認をする。

（5）6月のクラブ開きでは、集会形式で4年生以上が集まり、講師がそれぞれ自己紹介した後、代表児童があいさつをする。その後、各クラブに分かれて、年間計画（年間6回）を立て、活動を始める。

（6）最終である6回目は活動後、児童が書いたお礼状や全校児童で育てたさつまいもを渡し、感謝を伝える。

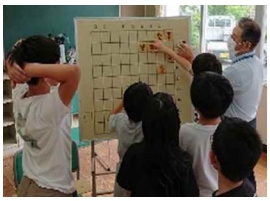
</td></tr>
</table>

3. 活動の様子

【クラブ開き】

【手芸クラブ】

【囲碁将棋クラブ】



活動に関わっている人・団体

津野町郷土資料館学芸員、教育支援センター指導員、地域おこし協力隊・和（なごみ）事務局長、個人商店、葉山荘施設長、津野町グランドゴルフ愛好会世話役、津野町食生活改善推進協議会委員、スクールソーシャルワーカー （計 10 名）

コーディネートのポイント

〇地域ボランティアの特技を生かすことと児童のしたいことを両立させながら、双方向で達成感や成就感を味わえるような運営を心がけている。クラブの終わりには、児童からお礼状等を各ボランティアに渡し、感謝の気持ちを伝えるようにしている。

取組の中での苦労や失敗 等

〇活動が定着する中で、すべてを地域ボランティア任せになってしまうことがあるので、教員は教育活動の一環としてのクラブ活動として意識しながら、児童への指導を行わなければならない。

活動後の変容

成果

〇児童と地域ボランティアの方が一緒に活動をする中で、「うまくできてうれしい」「またやりたい」といった感想が聞かれ、児童が達成感を持ったり、地域の方が良いところを見つけてほめてくださることで児童の自己肯定感が高まったりしている。

〇特に高学年の児童は、ふだんの生活の中で「地域をよくしたい」「地域の方に感謝したい」と話す場面があり、地域やそこに住む人を大切にしようとする気持ちが育っている。

〇教員にとっては、地域ボランティアの方が準備から運営すべてをしてくださることで働き方改革（負担軽減）につながっている。

〇地域ボランティアにとっては、特技を生かして子どもと関わる場があることで、生きがいにつながっている。

課題

〇地域ボランティアのほとんどが、仕事を持ちながら活動に参加している現状があり、活動への負担を感じている面もある。

〇現在活動に参加している地域ボランティアは、取組が始まった当時のメンバーがほとんどであり、後継者探しが課題となっている。

高知県地域学校協働活動事例集

令和５年３月

高知県教育委員会事務局生涯学習課
〒780-0850 高知市丸ノ内１丁目7番 52 号
TEL:088-821-4897　FAX:088-821-4505
生涯学習課 HP:https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310401
上記 HP から高知県地域学校協働活動事例集がダウンロードできます。